

高梁市吹屋(岡山県)

(1) 保存地区の概要

地区名 高梁市吹屋

種別 鉦山町

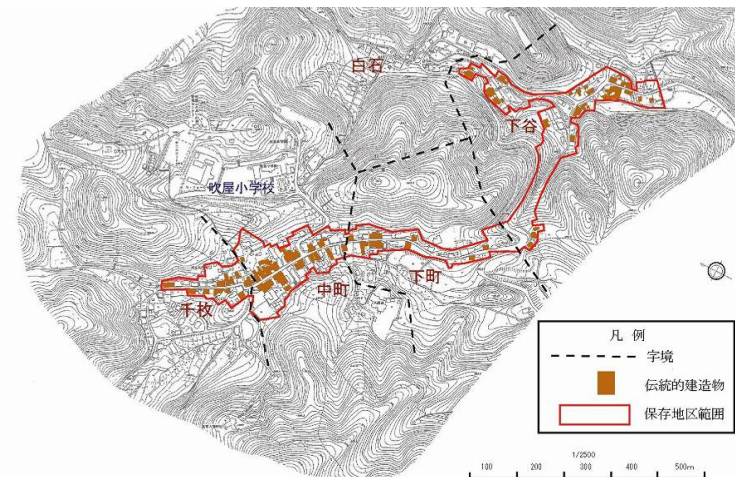
面積 約6.4ヘクタール

選定年月日 昭和52年5月18日

特徴 高梁市吹屋伝統的建造物群保存地区は、岡山県西部吉備高原上の山間地に位置する。吹屋は近世以降、銅山とベンガラで繁栄した鉦山町で、起伏の多い丘陵上の往来に沿って、町家主屋や土蔵等が建ち並んでいる。屋根は赤褐色の石州瓦で葺かれ、赤い土壁や白漆喰壁の平入・妻入の町家が混在し、地方色豊かな町並み景観を呈している。



伝統的建造物群保存地区 区域図



(2) 保存地区のあゆみ

昭和49年度(1974) 「岡山県ふるさと村」の指定を受ける

昭和52年度(1977) 「伝統的建造物群保存地区保存条例」制定
『重要伝統的建造物群保存地区』選定(5月)
修理修景事業開始

昭和53年度(1978) 吹屋町並保存会を結成

昭和62年度(1987) 防災施設完成

平成2年度(1990) 「おかやま景観賞」受賞

平成18年度(2006) 「旧片山家住宅」が国の重要文化財に指定

平成24年度(2012) 「都市景観大賞」受賞

令和2年度(2021) 日本遺産認定

(3) 保存地区の保存と整備

●主な事業

・修理・修景事業 156件

修理前



修理後



・道路の美装化

修理前



修理後



・防災事業(消火栓設置など)



・案内説明看板の設置



高梁市吹屋(岡山県)

(4)保存地区の活用とまちづくり

その1 伝統的建造物の活用とまちづくり

重要伝統的建造物群保存地区の選定により、町並みへの来街者数は上昇しましたが、近年は減少傾向にあり、現在では6万人前後で推移しています。

●「吹屋ベンガラ灯り」

吹屋の町並みに、弁柄焼で作成した灯籠を並べ、その間を吹屋小唄踊りが勇壮に踊ります。近年できたイベントですが、多くの観光客が夜の吹屋へ訪れるイベントになっています。

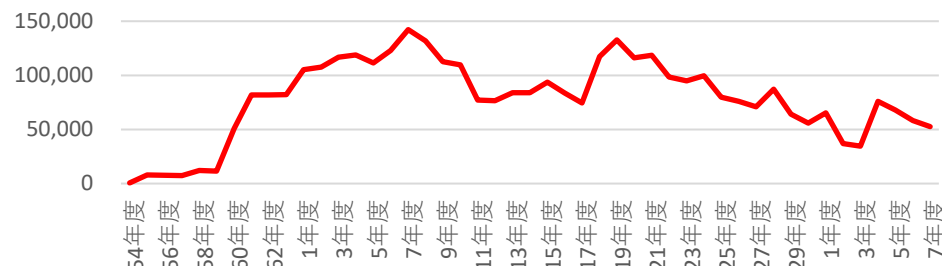


●「赤い町並みを彩る 吹屋アート展」

日本遺産「ジャパンレッド発祥の地 - 銅と弁柄の町・備中吹屋」の構成文化財でもある吹屋の町並みを舞台に、作家が空間を利用した作品を展示する企画です。



高梁市吹屋 来街者数



●グリーンスローモビリティの活用

伝建地区内と地区外を周遊するための2次交通としてグリーンスローモビリティを導入。

土日祝日に運行を行っている。時速20km以下のため、町並みをゆっくりと堪能することができます。



その2 店舗の増加、空き家の活用

保存修理工事が終わった家屋の内装を改修し、店舗として活用を図ったり、空き家を古民家再生事業により、滞在型宿泊施設として整備しました。2棟目を検討しているところです。



改修後飲食店をオープン



滞在型宿泊施設

その3 歴史的風致維持向上計画、日本遺産

●R2年度:歴史的風致維持向上計画(第2期)認定

吹屋地区を一つの重点区域として設定し、風致の維持向上に努めています。伝建地区外に所在する岡山県指定重要文化財「旧吹屋小学校校舎」の保存修理がR4、3月に竣工。一般公開を行っており、内部には日本遺産センターを設置。



●R2.6月:日本遺産 認定

伝建地区を核とした「「ジャパンレッド」発祥の地-弁柄と銅の町・備中吹屋-」のストーリーが認定され、観光客増に向けた様々な取り組みを実施している。

(5)住民等の取組

●観光ガイド

地元住民で構成する「吹屋観光ガイド会」は、選定後、すぐに設立され、吹屋の歴史について研究し、伝統的建造物群保存地区内を中心に案内し、来訪者の方に喜んでいただいています。



●移住者の力

移住してくださった方々によって、べんがら染めの体験や書店の開業など、吹屋の魅力向上や地域の活性化に繋がることが行われています。



●吹屋町並保存会役員の声

ー重伝建選定50年を迎えるにあたりー

銅とベンガラで繁栄した吹屋地区は、産業の衰退に伴い過疎化が急速に進行し流出・減少となりましたが、立派な家屋が連なる町並みは残りました。その町並みの保存に向けて、いち早く伝建選定に取組み、今に至っています。現在の家屋保存の状況は、所有者の世代交代もあり保存・継承が厳しく、空き家の増加、中には放置・崩壊の危機に直面する家屋も見受けられます。その打開策の一つとして、近年若者の移住に期待が寄せられています。



町並み保存とは、連続する家屋の保存であり、家屋保存は人が住んでこそ守られるものであり、空き家対策が大きな課題であります。この課題解決に向けては、最早内輪の話に留めず、幅広く様々な方々の意見を聞きながら、家屋に人が住む方策を探らなくてはなりません。移住を推進するための組織として「吹屋に住んでみんな会」という組織も設立されています。家主と協力しながら、空き家の解消と活用に取り組んでいくことが肝要だと考えます。